

懐かしい未来新聞

もしも、市役所職員が駆けつけられなかったら…

福祉避難所防災訓練

「現場主導」法人連携による初の試み

本市では、災害等により福祉避難所を開設する場合、「市職員が現場の調整役として駆けつける」ことを前提としています。大きな災害が起こった際に、本当に駆けつけられるのか、その実効性に課題がありました。

そのため、11月23日、避難行動要支援者支援事業を所管する当課と危機管理課との協働により、超大型台風襲来時における行政支援の遅延を想定した福祉避難所開設までの防災訓練を開催しました。訓練の実施においては、社会福祉法人甲賀会をはじめとする8つの市内社会福祉法人や介護事業者、地域住民等の協力を得て、計30名が甲賀荘デイサービスセンター（甲賀町大原中904）に参集しました。

訓練のシナリオはその場での臨機応変な対応や工夫を引き出すために、あえて細かい設定を決めずに、要介護5の高齢者や家族、隣接するグループホームの利用者に参加いただき、訓練を進めました。現場では、情報共有や役割分担の難しさも見られましたが、参加者同士が声を掛け合いながらお互い信頼しあおうとする姿が印象的でした。訓練後は、避難者や支援者、見学者全員でふりかえりを行い、やってみたいと感じた感想や課題を出し合い、災害に備えた法人同士の連携訓練の意義を確認しました。



①中村荘長(右)が現場で他法人を指揮している様子
②訓練時に用いたわかりやすさ工夫した資料
③甲賀荘に避難する要介護高齢者と家族の様子



▲⑤当事者も交えたふりかえりの様子



▲④自宅へお迎えに行く様子

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・福祉避難所防災訓練
・避難行動要支援者の外出支援
・複線人生のすゝめ
・重層物語 スイートメモリーズ 6

訓練により見えた課題

1. 訓練中、情報が錯綜する中で、状況判断が指揮官（甲賀荘荘長）に集中し補佐役がいなかった。
2. 福祉避難所として受け入れ人数を想定していなかった。（受け入れを断ることも大切）
3. 応援部隊の役割がわからず「指示待ち」状態になった。
4. 訓練に協力いただいた避難者本人と家族が安心して待てる空間づくりが必要だった。（お茶を出すなど）

「映画に行こう」避難行動要支援者の外出支援

11月25日、避難行動要支援者の辻久めぐみさんが、信楽開発センターで開催されたALS（筋萎縮性側索硬化症）をテーマにしたドキュメンタリー映画「杓（はる）かなる」の上映会に参加されました。その参加にあたり、個別避難計画作成の一環として、支援する専門職が映画会当日に同行し、辻久さんと移動の方法を共有しました。当課は、避難訓練も想定しながら動線や介助体制の状況を確認し、平時の外出支援を災害時の備えにも活かす取り組みとして進めています。



▲ドキュメンタリー映画「杓（はる）かなる」
▲外出時の移動支援の様子

辻久めぐみさん談

寝たきりで全介助が必要な私は、車いすに移乗する（乗り移る）ということも、お出かけすることも、ただの外出ではなく、非常時の避難行動につながると思っています。家族だけでなく、ヘルパーさんと一緒に外出準備をすることで、非常時、傍にいてくれる人だけで避難が可能になると思います。ただの外出、されど外出。寝たきりの私には全てが避難訓練のようなものです。

複線人生のすゝめ

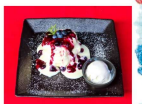
住宅建築課 空家対策室
まつもと けんた

トゥギャザーしようぜ 松本健太 さん

DIYが似合う男である。単に日曜大工が器用だというのではなく、向き合う姿勢そのものがDo It Yourselfなのだ。申し訳ないが、明確な人生設計があるタイプではない。まず「やりたいこと」があって、その後に暮らしがついてきている。それも「やりたいことは自分でやる」という徹底ぶりだ。資格とか経験はあまり重要なことではない。

「空き家のフロアを張り替えたい」と思ったら、自分でやってみる。YouTubeを見れば素人にもできるし、自分でやるから面白い。

ある時、次のステージがやってきた。一人でやるには限界があるというシンプルな事実。持続性を考えた時に、今のスタイルはどうなのか……。最近になって、「ひとりで完結させない」面白さに気がついた。いろんな人と一緒にやっているうちに、リノベーション物件がパンケーキの店（扇屋）に変わった。その近くに、ラーメン屋があったら面白いと話す。土山宿に店が並び歩いて楽しめる日は、そう遠くない。



▲土山町にある扇屋のパンケーキ

重層物語

スウィート・メモリーズ 6

二十三時ちょうど、背広姿の男性と階段を上がりきった透子さんが鉢合わせになった。私が息をひそめて待機していた角度からは、男の背中しか見えない。

「そんなところに突っ立って、いつ帰って来たんですか。驚かせんといってください。もう遅い時間ですから、先にお風呂入ってしまってください」

「ああ、分かっている」

男はそつなく返事をして、背広を脱ぎ捨て階段を下りていった。すると、男と行き違いうように階段を駆け上がった者がある。婿の鳥井か、いや違う。若い女性？ セーラー服を着ている。その娘はジャフジャフしたものがついた鞆をぶら下げている。

「あんたもこんな遅くまでどこ行ってる。明日学校あるんやろ」

「あーもう、うるさいって」

その娘は、透子さんの顔も見ないで、鬱陶しいとばかりに、向かって左の部屋へ入り扉を勢いよく閉めた。息つく間もなく、向かって右側の部屋からは、急にテレビの音が聞こえてくる。「ちょっと、テレビつけたままやんかあ」

透子さんはそう言いつて、音のする部屋の扉を開けて中に入ってしまった。

「……勝手に入ってんやんや」

若い男性の不機嫌そうな声が聞こえた。背広姿の男性の登場から今までの流れは、かなり異様ではあったが、まるでルーティンワークのような退屈さもわずかに帯びていた。

やがてテレビの音は消え、何事もなかったかのように透子さんが部屋から出てきて、静かに扉を閉めた。そして、ほほ仰向け状態で尻もちをついている私を見下ろして、こう言った。

「あの子は、いつもテレビつけたまま寝てしまつたのよ」

「そう、でしたか……」

「大村さん、今やでえ」

一階のダイニングから松田さんの声が響く。その聞きなれた声が、また現実の中にいること感じさせる。

《さて、ラストを飾りますのは、このナンバー。失った夢だけが美しく見えるのは何故かしら。甘く切ない思い出はあなたの胸にもあるでしょう。静かな夜に聖子がしっとり歌い上げます。スウィート・メモリーズ、どうぞお聞かせください》

練習のやり過ぎが裏目に出たのだらう。大村さんの曲紹介は緊張で声がうわすっていた。

《イントロが流れ出す》

♪懐かしい痛みだわ ずっと前に忘れていた……。

私ねえ、こんな風にして家族みんなに声をかけてたんよ。二階の窮屈な廊下をうろうろして夫も子供も昼間は外に出てるでしょう。何とも知らない私にでも分かる、外に出て競争させられてるんよ。そうしか思えへん。弱肉強食、出世、勝ち負け、受験、偏差値。競争が嫌いな私だけが家に残って、家だけはほっとする場所にしたと思って。

ずるい考えやけど、近所付き合いはそこそこにして、家族の時間を大事にしたいと思つたんよ。そやけどねえ、うまくいかへんのよ。みんなほんまに疲れ切っていて、目だけ赤くギョッつかせて、リビングよりも閉じた部屋が休まるんやろねえ。思い描いた一家団欒なんてほんまに夢物語で。

夜の遅い時間に、狭い廊下をうろうろと、さっさと返事もなし。当時はアホらしいやら情

けないやらで。それでもねえ、不思議やけど、今になってみたら懐かしいのよ。キュッと胸が痛くなるやけど、あの頃が一番懐かしいなあと思つんよ。

夫に似たお隣さん。私みたいな、一つもうまいことでけへんかったもんが、ここで暮らしてたこと、忘れんといてね。

ちょうど曲が流れている間の独白（モノローグ）だった。

見知らぬ町に迷い込んで、偶然入った劇場で舞台を見たような妙な時間だった。すでに私の目の前に透子さんの姿はなく、左右の扉は固く閉じられ、人の気配が完全に消えている。

「北島くん、何をしてるんや。もう帰らせてもらつてえ」

松田さんが私を呼んでいる。両手で頬を二回叩いて立ち上がり、一步一步階段を下りる、手すりの感触がひんやりとする。

「今、誰かお風呂に入ってますか？」

階段を下り切ったところで、私は松田さんに聞いた。

「風呂？ 何や北島くん、終さんちで入って帰るんか」

「いや僕ではなくて、背広姿の男性が二階から下りてきたと思うのですが……」

「何やて、背広姿？ ああそつか、婿さんのことか？」

そう言いつて松田さんが指さした先には、酔いつぶれた鳥井がコタツで寝転んでいた。

「それよりも北島くん。ナイスなナンバーだったらう。透子さんともうまく対話できたんじゃないかな」

ラジカセを担いだ大村さんが得意げに言った。

「……対話。いえ、独白というか。言葉が出なかったというか」

「そうだったのかい。まあ本番は誰でも緊張するものだ。しかし、透子さんは満足そうにしてるじゃないか。それで十分だ」

「あの、女子高生があがってきたんですよ。若い男性も部屋でテレビを見ていて、それで、ねえ、透子さん」

「おいおい、何を寝ぼけたこと言ってるんだい。さあ日が変わつてしまつ。坊やおねんねの時間だ」

大村さんはまったく取り合わず、さっさと身支度を整え、椅子の背もたれに掛けてあった私の上着を「帰るぞ」とばかりに差し出した。

帰り際、見送りに来た透子さんが、分厚い玄関マットの上に立ち、ポツリと言った。

「一人で幸せになつたなんて。それは無理やからね」

その続きを待ったが、透子さんは「おやすみなさい」と言いつて、扉を閉めてしまった。その一言は、とても重要なことのように聞こえた。しかし、意味がうまく掴めない。私が理解するにはまだ早い、大人になるまで分らない……。

私は、大人たちの顔をキョロキョロと見上げ、きょとんとした幼児みたいな気持ちになつていた。

それでも、終家を一步出た時の外気の冷たさは、鮮明に覚えている。ただ、それ以外の何か重要なことについては、うまく答え合わせができなかっただけに過ぎない。

